

千葉県佐倉市

# 苗作り専門の生産者にも好評の「タキイねぎ培土」

## 「発芽や生育が均一でロスがない」

(編集部)

2010年、東京で初積雪が記録された翌日の2月3日、宮利向けに根深ネギの苗生産を行う、千葉県佐倉市の鈴木農園さんを訪ねました。

お話をうかがった鈴木岳志さんは、実弟の祐二さんやご両親、パートナー数名とともに、苗生産を専門に行う若い生産者です。鈴木農園さんでは、過去にメロンやスイカ、キュウリなどの露地栽培を行い、自家育苗していましたが、ほかの生産者の育苗を頼まれるうちに、苗生産主体へ経営をシフト。やがて、県内の大手ホームセンターの店頭売り苗を納めるようになり、現在へと至ります。

店頭苗はカットパック仕立てをメインとし、果菜類全般やキャベツ、ブロッコリーの葉菜苗など数多くの品目を、

1500坪の育苗ハウスで生産。3年前からは近隣の農業生産法人さんの発注に比べ、根深ネギの生産者用チェーンポット苗にも取り組まれるようになりました。

店頭売り苗の場合、培土は自家製を使いますが、ネギの育苗にはリン酸の多い専用培土でなければ難しいと、当初から判断。価格面、品質面でよい種苗店さんがすすめてくれた「タキイねぎ培土」を選択したそうです。

鈴木農園さんでのネギ苗生産は1月末からスタートし、6月納め分まで一区切り。10月上旬まきの年内納め分もあり、育苗は長期にわたります。そのため、50ℓの「タキイねぎ培土」を、年間400袋近くも使うとか。そんな鈴木さんに「タキイねぎ培土」の印象



←まき溝の穴ができるように、ミキサーで水分をなじませる。空気層ができてその後の灌水が入りやすく、発芽率も向上する。



↑チェーンポットに土を詰め、鎮圧板で穴あけ。ネギの根が上ってしまうよう、深めの1cm程度とする。2~3粒落としては、重なった時に上部のタネが根上がりしやすいため、しっかり穴をつくる。



「タキイねぎ培土」を大きな武器に、本格的な業務用ネギ苗の生産を始めた鈴木さん。

を伺いました。

「まず、安心感が違います。年間を通じて品質が均一で扱いやすく、肥効は2カ月近く続きますから、育苗管理がスムーズです」

追肥に関しては、納め先の要望に合わせて、出荷間際に色を濃くしたり、ために仕上げたりするため、調整的に液肥を使用するだけだそうです。

「均一に発芽し、ロスもありません。納入先の生産者さんからは『鈴木さんが仕立てたネギ苗は、本圃に植えても初期の活着がよく、収穫までが早い』と好評をいただいています。私は適切な肥効によって生育が順調に進む、培土のおかげだと思っています。茎がかたくてガッチリし、根張りが太い苗が理想ですが、ねぎ培土ならそれに応えられると思いますよ」

もちろん、苗作りは培土だけではできません。そこは、培った鈴木さんたちの育苗技術と経験があつてこそです。それでは、鈴木さんにとって、苗作りの魅力とはどういうものなのでしょう。

「店頭売りの場合は、売れた後のことはなかなか分からないけど、営利生産者によい苗を作つて納めたら、結果が出ると『よかったよ』っていつでもかえる。改めて、売った後のことも気にかけるようになりました。苗半作と

いいですが、苗のよしあしが結果としてダイレクトに表れる。責任も大きいし、生産者からの指摘や希望を聞いて、苗作りにフィードバックできるのもいいですね」

そして、最後にこれからのことを語っていただきました。

「父親の代から取り組む、メインのホームセンター用の店頭売り苗はもちろんです。私の代では、業務用をこれからも増やしていきたいですね。納期と品質を守るのは大変ですが、プロとしては当然それをしっかりクリアして、少しでも産地の省力化や高齢化対策のサポートができれば、やりがいも大きいです。次の代の奏汰や陽莉がどうするかは、気が早すぎて(笑)分かりませんが、力を合わせて引き継げるようにしていきたいですね」



↑お父さんを応援?にきた奥さんの暁子さんと3歳の奏汰くん、2歳の陽莉ちゃん。



↑おおよそ出荷1週間前の苗姿。根の回り具合はこの程度。



→発芽庫には4〜5日、25℃、湿度80%程度で管理。芽が少し上がる程度まで置く。



↑大型連棟ハウス2棟、パイプハウス4棟で生産。年間で「タキイねぎ培土」を400袋、264穴のチェーンポットを4,000冊ほど使う。

(写真は2月3日撮影)



→発芽庫から出した後、冬場は夜のみ小トンネルをかけ、大きくなればとっぱらう。